

DAS KAPITAL

資本論

カール・マルクス

社会科学研究所 監修
資本論翻訳委員会 訳

5

新日本出版社

カール・マルクス

資 本 論

5

第二卷 第一分冊

社会科学研究所 監修

資 本 論——第5分冊（全14冊）

1984年11月15日 初 版

定価 850円

監修者	日本共産党中央委員会付属 社会科学研究所
訳者	資本論翻訳委員会
発行者	松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区本町1-8-7

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (320) 7111

振替番号 東京3-13681

印刷 光陽印刷 製本 みさと製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

凡 例

一 本書は、カール・マルクス著『資本論』第一―第三部の全訳であり、新書判全一三分冊で刊行され、総目次・総索引を収めた別冊がこれに加わる。

二 翻訳にあたっては、ドイツ語エンゲルス版を主たる底本としてドイツ語各版のほか、英語版、フランス語版、ロシア語版その他各国語諸版を照合または参照の上、訳出した（訳出に使用された各国語諸版については本凡例末参照）。また、従来の邦訳はすべて参照した。

三 注については、マルクス、エンゲルスによる原著者注は（ ）に漢数字を用いてそれを示し、各段落のあとに訳出した。なお、訳文中や、*印によって訳文のあとに、〔 〕を用いて挿入されたものはすべて訳者による注および補足である。これらは今回の訳出にあたり独自に作成された。

四 訳注のなかで、〔邦訳『全集』、第〇巻、〇〇ページ〕とあるのは、ドイツ民主共和国ディーツ社発行の『マルクス・エンゲルス著作集^{ヴェルケ}』を底本とした邦訳『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）の巻数とページ数をさしている。

五 『資本論』のドイツ語原文にあたろうとする読者の便宜のために、わが国で現在入手の容易なヴェルケ版『資本論』（ディーツ社）の原書ページ数を、訳文の欄外上に（ ）を用いて付記した。

六 訳文中の“ ”でくくられた語、句、文は、すべて、原著者によってドイツ語以外の国語（ラテン語などを含む）が単独で使用されている個所の訳である。なお、それらドイツ語以外の国語による語、句、文が、同じ意味のドイツ語と併記されていて、相互の言い換えとして使用されている場合には、それらにニュアンスの相違がある場合をのぞき、該当の他国語の訳出や明示を省略した。文意を理解するうえで必要な場合には、原語がそのまま示されている。

七 原著者の引用文にその原典との相違がある場合には、原則として原著者の引用により訳出し、必要な場合には訳注によりその異同を示した。

八 引用文献のうち邦訳のあるものは、入手の便宜なども考慮し、適当と思われるものを「」を用いて掲げた。ただし、訳文については、掲げた邦訳書のそれに必ずしもよっていない。

九 訳文で、傍点を付した部分は原文のイタリック体の部分を表わしている。

一〇 人名、地名等については、それぞれの国での発音の再現につとめたが、わが国での慣用に従ったものもある。

二 本訳書については日本共産党中央委員会付属社会科学研究所が監修を行なった。研究所の委嘱により、五〇名を超える研究者が訳出に参加し、翻訳のための委員会が組織され、さらに経済学以外の領域の研究者多数の協力を得た。翻訳者は各分冊ごとに訳出グループを編成し、すべての分冊にわたる全体の協議会、分冊グループ内あるいは若干の分冊グループ相互の検討会が行なわれ、分冊ごとに作成された訳稿を、さらに独自に編成された全巻にわたる編集・統一者グループがあらため

て全体との関連から詳細に検討を加えたうえ、分冊グループとの協議を繰り返して完成稿とした。それらの作業の過程で、経済学以外の学問の研究者から提出された意見が参考にされた。

本分冊（第五分冊）については、各分野の研究者の協力を得ながら、左記の体制で訳出・編集が行なわれた。

翻 訳 者 川鍋正敏

編集・統一者 岡本博之 宇佐美誠次郎 土屋保男 杉本俊朗 朝野 勉

（付） 第二巻の翻訳にあたって使用された各国語版

ドイツ語版については、初版、第二版、カウツキー版、アドラツキー版、ヴェルケ版を利用し、また、以下の各国語諸版を照合または参照した。英語版（モスクワ版、ペリカン版、カー版、ゾンネンシャイン版）、フランス語版（エディシオン・ソシアル版、ジアル版、コスト版）、ロシア語版（サチネーニャ版〔第二四巻、第四九巻、第五〇巻〕、ステパーノフ版）、スペイン語版（シグロXXI版、エディトリアル・カルタゴ版、フォンド・デ・クルトウーラ・エコノミカ版）、イタリア語版（リユニティ版、リナーシタ版）、中国語版、朝鮮語版、ポーランド語版、チェコ語版、ハンガリー語版、ルーマニア語版、ブルガリア語版、ほか。

目次

序言……………エンゲルス……………五

〔第二版への序言〕……………エンゲルス……………五

第二部 資本の流通過程

第一篇 資本の諸変態とそれらの循環……………五

第一章 貨幣資本の循環……………五

第一節 第一段階、 $G-W$ ……………五

第二節 第二段階、生産資本の機能……………五

第三節 第三段階、 $W'-G'$ ……………五

第四節 総循環……………六

第二章 生産資本の循環……………一〇

第一節 単純再生産……………一〇

第二節 蓄積、および拡大された規模での再生産	二三
第三節 貨幣蓄積	二三〇
第四節 準備金	二三三
第三章 商品資本の循環	二三七
第四章 循環過程の三つの図式	二三八
第五章 通流時間	二九二
第六章 流通費	二〇二
第一節 純粹な流通費	二〇二
1 購買時間と販売時間	二〇三
2 簿記	二〇九
3 貨幣	二二二
第二節 保管費	二二四
1 在庫形成一般	二二五
2 本来の商品在庫	二三五
第三節 輸送費	二三三

目次

第二卷分冊目次

第一分冊

第二部 資本の流通過程

第一篇 資本の諸変態とそれらの循環

第一章 貨幣資本の循環

第二章 生産資本の循環

第三章 商品資本の循環

第四章 循環過程の三つの図式

第五章 通流時間

第六章 流通費

第二分冊

第二篇 資本の回転

第七章 回転時間と回転数

第八章 固定資本と流動資本

第九章 前貸資本の総回転。回転循環

第一〇章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。重農主義者とアダム・スミス

第十一章 固定資本と流動資本とにかんする諸

学説。リカードウ

第十二章 労働期間

第十三章 生産時間

第十四章 通流時間

第十五章 資本前貸の大きさにおよぼす回転時

間の影響

第十六章 可変資本の回転

第十七章 剰余価値の流通

第三分冊

第三篇 社会的総資本の再生産と流通

第十八章 緒論

第十九章 対象についての従来の諸叙述

第二〇章 単純再生産

第二十一章 蓄積と拡大再生産

資本論 経済学批判

第二卷 第二部 資本の流通過程

フリードリヒ・エンゲルス編集

(7) 序 言

『資本論』の第二部を印刷に付せるように作成すること、しかもそれが一方では脈絡の通った、できただけ完結した著作として、しかし他方ではまた編集者の著作ではなくもっぱら著者の著作として作成することは、容易な仕事ではなかった。現存する、たいていは断片的な論稿の多いことが、この課題を困難にした。できている限りでは、完全に印刷に付せるように編集されていたのは、せいぜいただ一つ（第四草稿）だけであつた。ところがこれも大部分は、その後の時期の改訂によって使ひものにならなくなつてゐた。材料の主要部分は、その大部分が実質上仕上げられてはいたが、文章上では仕上げられてゐなかつた。それは、マルクスが抜き書きをつくるさいに用ゐるのを常とした用語で書かれていた。すなわち、ぞんざいな文体、くだけた、しばしば無遠慮な諧謔的表現かいぎやくと言ひ回し、英語とフランス語との術語、しばしば文全体が、しかも数ページにもわたつて英語文。それは、考えがそのつど著者の頭のなかで展開されるままの形で書きおろされたものである。詳細に述べられた個々の部分とならんで、それと同じく重要な他の部分は示唆されているだけである。例証のための事実的材料が集められてはいるが、ほとんど分類されておらず、まして加工されてはいない。諸章の終わりには、

早く次に移ろうとして、しばしばほんのわずかのきれぎれの文章が、そこに未完のまま残された展開のしるしとしてあるだけである。最後に、著者自身にもときには読めないほどの周知の筆跡である。

私は、草稿をできるだけ文字どおりに再現し、文体についてはマルクス自身が変更したであろう点だけを変更し、またどうしても必要でありしかも意味上まったく疑問の余地のない場合に限り、説明のための挿入文とつなぎの文を挿入することで満足した。その解釈にほんのわずかでも疑問の余地があった文については、まったく文字どおりそのまま印刷することにした。私による書き換えと書き入れは、全部で一〇印刷ページにも達しておらず、それも形式的な性質のものにすぎない。

(8) マルクスが第二部のために残した自筆の材料を数え上げるだけでも、彼がその偉大な経済学的諸発見を公表するまえに、いかに比類のない誠実さをもって、いかに厳格な自己批判をもって、それらの発見を最大限に完璧なものに仕上げようと努力したかが証明される。まさにこの自己批判のために、彼は、ただまれにしか、新たな研究によって絶えず拡大する彼の視野に内容的にも形式的にも叙述を適合させるにいたらなかったのである。ところで、この材料は次のものからなっている。

まず第一に、一八六一年八月から一八六三年六月までに書かれた二三冊^{*1}からなる四つ折り判（全紙を二回折って八ページにした判。二つ折りは四ページにした倍の大きさ）一四七二ページ^{*2}の草稿『経済学批判』がある。^{*3}これは、一八五九年にベルリンで刊行された同じ題名の第一冊（邦訳『全集』、第一三巻、三一―一六三ページ参照）の続きである。これは、一一二二〇ページ^{*4}（ノート第一―五冊）において、さらにまた一一五九―一四七二ページ^{*5}（ノート第一九―二三冊）において、『資本論』第一部で研究さ

れた諸主題——貨幣の資本への転化から最後まで——を取り扱っており、これらの主題についての現存する最初の原稿である。九七三—^{*6}一一五八ページ（ノート第一六一—一八冊）は、資本と利潤、利潤率、商人資本と貨幣資本、すなわちのちに第三部の草稿で展開されている諸主題を取り扱っている。それに反して、第二部で取り扱われた諸主題、およびのちに第三部で取り扱われたきわめて多くの諸主題は、まだ特別にまとめられてはいない。これらの主題は、ことに、この草稿の主体をなしている部分、すなわち二二〇—^{*7}九七二ページ（ノート第六—一五冊）の剰余価値にかんする諸理論のなかで、副次的に取り扱われている。この部分は、経済学の核心である剰余価値理論の詳細な批判的な歴史を含んでおり、またそれとともに、のちに第二部および第三部の草稿で特別に、かつ論理的連関において研究されている点の、先人たちにたいする論争上の対立という形で展開している。私は、この草稿の批判的部分を、第二部および第三部によってすでに利用済みの多くの個所をのぞいて、『資本論』第四部として公刊するためにとっておくことにした。この草稿は、たいへん価値のあるものではあるが、第二部のこの版にはほとんど利用できなかった。

*1（新『マルクス・エンゲルス全集』Ⅱ、3・1（ベルリン、一九七六年）の邦訳『資本論草稿集』4、大月書店、*一三、*四五、*五四ページによれば、「六月」ではなく「七月」）

*2（同前訳書、*五四ページで「一四九九ページ」と訂正）

*3（このノートは、新『マルクス・エンゲルス全集』Ⅱ、3・1—6として、一九七六—一九八二年に刊行された）

*4〔同前訳書、*四六、*六五ページで「二一九ページ」と訂正〕

*5〔同前訳書、*五四ページで「一四九九ページ」と訂正。ただし、一四七四—一四九九ページは白紙〕

*6〔同前訳書、*五二ページで「九七四ページ」と訂正〕

*7〔同前訳書、*五二ページで「九七三ページ」と訂正〕

日付から見てこれに続く草稿は、第三部の草稿である。それは、少なくとも大部分が一八六四年および一八六五年に書かれている。これがだいたいにおいてできあがってのち、はじめてマルクスは、第一部すなわち一八六七年に刊行された第一巻の仕上げに着手した。この第三部の草稿を、いま私は印刷のために手を入れている*。

*〔こんにちでは、一八六三年七月から一八六五年末までのあいだに、第三部だけでなく、『資本論』全三部の草稿が書かれたと考えられている〕

次の時期——第一部刊行後——のものとしては、第二部用に、二つ折り判の草稿を四つ集めたものがあり、マルクス自身によって第一から第四までの番号がつけられている。そのうち、一八六五年または一八六七年のものと推定される第一章稿（一五〇ページ）は、現在の区分での第二部の最初の独立の、しかし多かれ少なかれ断片的な論稿である。これからも利用はできなかった。第三草稿は、一部分は引用文とマルクスの抜き書き帳への指示とを集めたもの——おもに、第二部、第一篇にかんするもの——からなっており、一部分は個々の論点の論稿、ことに固定資本および流動資本にかんする、また利潤の源泉にかんする、A・スミスの諸命題の批判の論稿からなっている。さらに、剰余価値率